

東嶺和尚法語・入道要訣（現代語訳）

PDF

田 中 寛 洲

禅宗の凡夫の境地から直ちに仏の境地に登るには、五つの料簡（解釈）がある。一、同性の義、二、異塗の義、三、憤励の義、四、進修の義、五、帰本の義である。これが重要な道筋である。

1

一、同性の義

人々が具足する本性と、三世（過去・現在・未来）の諸仏の本性と、何ら変わりがない。有難さや莊嚴さも同じである。光明も同じように放っており、智慧や神通も同様である。

例えば、太陽の光が山河大地を照らしてあますところが無いようなものである。汚い糞土の上にも、貴重なものにも、同じように明るく照らしている。

ところが、（見る眼のない）盲人（普通の凡夫）は、その光の中にいながら、見ることも知ることもない。まことに哀れなことである。

二、異塗いずの義（「塗」とはこの場合「道」という意味）

本性は諸仏と衆生とは同体で何ら変わりはないが、その心の目指すところが違っているのである。仏は内に向かって、本心を照らされるのに対して、衆生は外に向かって、さまざまな対象に心を散乱させる。

したがって、物を愛しては貪欲どんよく（むさぼり）となり、憎む者に対しては瞋恚しんい（怒り）を起し、その思いが凝り固まって愚癡ぐち（無知）となる。この貪・瞋・癡ちの三毒の性質に迷いくらまされて、本心をも失うことになる。

貪欲が深い者は餓鬼となり、瞋恚が深い者は修羅となり、愚癡が深い者は畜生となり、三毒すべてを持っている者は、地獄に堕ちて、さまざまな苦しみを受ける。これを「四惡趣」というが、恐るべき極みである。

貪・瞋・癡があっても、自ら戒めて三毒に身を任せてほしのままに振る舞わないのが、人間であり、生まれ変わり死に変わりしてもこの身を失うことがな

い。

貪・瞋・癡がようやく静まって、自ら戒めなくても三毒に身を任せることのない者は、天上に生まれる。これを「六欲天」という。

三毒の性がなくなって、ぜんじょう 禅定と智慧の徳はあっても、禅定に定愛（執着）し、瞋・癡の習いがまだ残っているのは、色天十八種の中に生まれたのである。

定愛がすでに尽きてはいるものの、未だ仏の知見を開かないのは、「無色界の四天」という。しょうもん 声聞・えんがく 縁覚の修行者は、この天に生きる者である。

先の「四悪趣」に「人天」を加えれば、「六道」となる。しょうもん 声聞・縁覚と菩薩と仏とを加えれば、すなわち十界となる。

およそ六道のうちにいる間は、たとえ人間界や天上界（人天）の楽しみを受けることがあっても、皆苦しみの種である。どうしてかといえば、貪・瞋・癡の煩惱の深い心をもって、この世界を作り上げ、この身を感じ出したのであるからである。

そうならば、この業である煩惱を滅しなければ、解脱はできない。この六趣の苦海を解脱しなければ、真の安楽ではない。

この苦海を解脱しようと思うならば、先ず無常を観ずるべきである。生ある者は必ず死ぬ。若いからといって当てにはならぬ。強い者も危うい。富貴な者も衰える。尊貴な者もいつまでもそのままおれるものではない。長寿も八十年を過ぎることは稀である。

したがって、この世は無常であり、楽しむべきことは何も無い。貧しければ無いことに苦しみ、富める者は有ることに苦しみ、身分の高い者は高いことに苦しみ、卑賤の者は卑賤であることに苦しみ、衣食に苦しみ、妻子に苦しみ、財宝に苦しみ、位官に苦しむ。

とにかく、煩惱の性を滅ぼして解脱の道に到るのでなければ、国王大臣・諸天神仙の位に昇ることがあっても、電光や朝露のごとくはかないもので、ただしばらくの間そうあるだけである。

縁が合すれば了々としてあるとはいえ、縁が散じてしまうと空である。父母の縁を借りてこの身を得た。地の縁をもって皮肉筋骨ができた。水の縁をもって唾・涕・つば なみだ濃・うみ血ができ、火の縁をもって暖和柔順である。風の縁をもって呼吸をする。

この四つの縁がたちまち尽きてしまえば、身体が冷たくなり息も絶え果てて、

我というものはない。そのときこの身は実際の我ではない（無我）。ただ仮の宿に過ぎぬ。どうしてこの仮の宿に貪著して、永劫えいじょうの事実を顧みようとしないのか。

この無常・苦・空・無我の四波羅蜜を觀じて、菩提の道を求めるのを、声聞四諦の法という。これは諸仏が入道する際の最初の肝要な入り口である。

また縁覺の十二因縁というのは、本心が暗いためにさまざまな業を作るが、これは無明と行との二つである。業が積もって習性となる。

その父母に縁を頂いて胎内に宿る。これが識と名色となり、体形が出来上がって六根がようやく成るのを六処という。

出生し、未だ好き嫌いを少しもわきまえないのを触という。

三歳になってからは、早くも花や味を悦び、美しい色を愛する、これを受という。

十歳以後、財色を求める心があるのを愛という。

十五、六歳を過ぎては、しきりに貪著するのを取という。

二十歳より盛んに業を作つて、罪を恐れないのを有という。

この業を作り罪を重ねるうちに、未来に生まれる処が善悪ともに定まるのを生という。

一生このような業のみを作つて、老い衰えて死ぬ、というのを人間十二因縁という。縁覚はこのことを観じて、煩惱を尽くして菩提に入る。これもみな諸仏入道の方便である。

無明の暗い心を悟つて、その真実の本性を見得すれば、無明即仏性となり、行即道となり、識即智徳となる。その場合には、十二因縁がみな正法に随順して、ついに解脱という大いなる成果に到ることになる。

また菩薩の六波羅蜜^{はらみつ}というのは、布施・持戒・忍辱・精進・禅定・智慧のことである。

先に述べた声聞・縁覚の二門の修行は、ただ自分一人を利益^{りやく}するのみで、他人を利するという方法がない。

菩薩は自利の仏道修行をしつつも、また他を教化する行を兼備しているもの

である。

法のために財を惜しまず、上は師長（尊者・年長者）に供養し、下は貧しい人たちに施しを与えるのは、財施である。自己の智徳のできるかぎり、人のために説法・教化するのは、法施である。この二つの施しをもってあまねく衆生に施す。これを布施波羅蜜とする。

心の内に道心を護持し、十重四十八輕の戒行を修する。これを戒波羅蜜とする。

道理を觀ずることを忍受し、褒められたりそしられたりしても、一向に動ずることなく、一念の怒り・恨みも起さない。これを忍辱波羅蜜とする。

自利利他の大いなる実践において、日々に増進し、怠慢を誡め励み進むのを、精進波羅蜜とする。

坐禅工夫を専一に心がけ、一切の妄想を離れるのを禪定波羅蜜とする。

教理を究め、仏の意を察して、さまざまな迷いの情を打破して目覚めるのを、智慧波羅蜜とする。

以上が菩薩の六波羅蜜と言われるものである。この声聞・縁覺・菩薩の修行を三藏ともいい、三乗ともいい、諸仏成道の方便にして、万古不易（未来永劫変わることもなき）の法である。

一仏乗の学者が、これを小乗三藏の法であるとして痛く退けるのは、小乗の偏見を碎いて大乘の妙理を開悟させんがためである。大乘の妙理を信解しんげすれば、三乗の修行門はみな大乘門を補佐する助けとなる。

例えば、臣民・奴婢ぬひは君主よりも劣るとはいえ、もし彼らを捨ててしまえば、君主の威徳を失うようなものである。臣民が多いゆえに君主も尊い。小乗を円満具足するがゆえに、大乘の道も広大となる。三世の諸仏・歴代の祖師も、みな三乗の修行門から法成就に到られたのである。

いま心ある人は思うべきである。四惡趣の苦患（苦しみわずらい）はどれも恐ろしいものである。人天の福徳も頼りにはならぬものである。ともかくも声聞の四諦こそ、おのおののよき修行である。

この世の中はみな苦である。無常であって心細い住み家である。すべてはついに空に帰する。この身体すら我が物ではない。まして妻子・珍宝および王位・眷属・牛馬などが我が物でないことはいうまでもない（苦・無常・空・無我）。

死ぬ時には独りで死んで行かねばならぬ。誰が自分に伴ってくれるであろうか。何物を死んで行く身に携え持つことができようか。

今の他人は前生の親子・夫婦である。今の親子・夫婦は来生の他人である。今の牛馬・魚鳥は前生の眷属である。今の眷属は来生の牛馬・魚鳥である。業に引かれ縁に随って、どのような生を受け、どのような身となるかも分からない。

そうであるから、今の親子・夫婦のような極めて親しい人であっても、（死んで）別れてしまい、どの国に生まれ、何になっているかも知れない。

骨肉の親しさもただ五十年の間である。例えば、一夜の宿りの友であるということで深く愛し、その他の人を憎むようなものである。一夜明けて宿を出立すれば、その友は西東に散って、自分は独りで行く。以前に憎んでいた人は、またその夜の友となる。

（それゆえ）ただ頼むべきは菩提であり、求むべきは仏果である。この身は十二因縁をもってできた業障の皮袋である。まず無明の根元を打破せねばならない。根元が破れて枝葉が残っていることはない。

財施・法施をも自分の力に応じて心がけよ。仏の禁戒を守って犯してはなら

ない。物事に耐え忍んで怒りを起してはならない。朝夕仏や神に祈り誓って、励み進んで念々忘れてはならない。暇があれば坐禅せよ。法を聞いて迷いを覚破せよ。これが菩薩の六波羅蜜の法である。

この根本の性は諸仏と同一体ではあるが、仏は内に向かい、衆生は外に走るという一念の誤りから、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上という六趣、声聞・縁覚・菩薩の三乗、それぞれ九つの世界の衆生に分かれたのである。

これを異塗の義というが、その根本に帰れば、また同じように諸仏と同一体である。どうしてそれを願わずにはおれようか。

三、憤励の義

諸仏と同体の性を得ようとするならば、まず無明の根元を明らかにして悟らなければならぬ。どのように明らかにするのか。自らの本性を疑うべきである。どのように疑うのか。

眼に色を見、耳に音声を聞き、身体では冷暖を感じ、意には逆境・順境をわきまえ知るはずである。これをけんもん見聞覚知といって、修行の種（基本）である。

凡夫は色を見ては色に迷い、音声を聞いては音声に迷い、冷暖を感じては冷

暖に迷い、逆境・順境を知っては逆境・順境に迷う。これを衆生は外に向かう
というのである。

菩薩の修行は、色を見る時は、その見ているもの（自己）自身を疑い、音声
を聞く時は、その聞いているもの自身を疑い、冷暖を感じる時は、その感じる
もの自身を疑う。その逆境・順境を知る時は、その知るもの自身を疑う。これ
を諸仏は内に向かうというのである。

このように修行すれば、まず凡夫・衆生の心向けどころとは別である。諸
仏の心の向けどころと等しく、その智徳を完成したわけではないが、まずは菩
薩の仲間に入ったものと知るべきである。

常に諸仏に大願をかけ神明に祈り祖師に誓い、このように一大事を一度は成
就して、自利利他の願海を遊戯ゆげしようと思うのである。

朝起きてはどんなに忙しくても、まずこの一念を立て、まずこの見聞の工夫
を試み、そのあとで自分の仕事に従事する。食事を食べる時にも、まずこの一
念を先として、この工夫を試みるべきである。トイレに入る時にも、まずこの
一念を立て、この工夫を試みるべきである。日が暮れて就寝する時は、しばら
く寝具の中で坐禅して、この一念を先としてこの工夫を試み、それから身を放
つて寝るがよい。これを諸仏・菩薩の正直・正路の修行とする。

諸仏と同体の本性を取り失って、六趣・四生の間に迷い来ることを憤慨して、根本性に向かって工夫の心を励まねばならない。これを**憤励の義**という。

四、進修の義

先に述べた根本の工夫の心を励まして、念々に進み、事々の上に修し習うべきである。

その工夫の正念をひっさげて、行く時は行く時に修し、いる時はいる時に修し、人と話す時は話す時に修し、話さない時はいよいよ正念を励まし、物を見る時は見ているもの（自分）自身を疑い、物を聞く時は聞くもの（自分）自身を疑い、多忙で物に心を奪われやすい時は、奪われているもの（自分）を疑うのである。

このように奪われるものは何ものぞと疑う時には、奪われてもまた工夫の正念を離れない。病ある時は、その苦悩をもって工夫の種（基本）とすべきである。

とにかく工夫は多忙であるのも、また工夫増進の一端である。ただ普通に物静かな時だけならば、工夫の精彩ということはなくである。工夫の精彩が

なければ得力（ある境地を得る）こともない。

国の乱れたのを治めるには、一大事に際して、戦場に出向き、恐れず取りかかり引き返して戦ってこそ、勝利は得られるものである。

工夫の法戦もそれと同様である。さまざまな出来事に心を奪われ、もろもろの想念に心を乱される時こそ、勝負を決する好機である。この心をわきまえ、^{けたい}懈怠の心なく進まねばならない。

物静かな時は、これぞまことに城中にあつて兵法・軍術を修練すると心得て、丹誠を尽くして修行せねばならぬ。物騒がしい時は、これぞ戦場に臨んで勝負を決する時であると心得て、力を尽くして工夫せねばならぬ。

得力がある人もない人も、共に諸仏・菩薩の正直正路の中へ旅立ちした人々である。例えば、世間の強健な人は、一日に十里・十四・五里行くが、弱い人は、五里・三里を行くようなものである。

百里の遠い国に到るのに、強い人は八日か九日あれば容易に行ける。弱い人は二十日かかるであろう。しかしながら、到着してのちは、同じ国にいて同じ人々のもとにいるようなものである。

力を尽くして精進勇猛であるのと、志が怠って進みかねているのとは、これと同様である。根性がさといのと鈍いのも、また同様である。病身で成就し難いのと、頑強で行ない易いのも、同じである。

人の利鈍により、根機の強弱により、省悟・得道の遅い早いができる。修習することと道を得ることに關しては、何ら異なることはない。何と頼もしいことではないか。

願わくば、賢い人もそうでない人も、位の高い人もそうでない人も、この正直修行の旅立ちをされんことを。

この進修の中にまたひとつの通理がある。工夫が純熟すれば、思わずはからずに得力を得ることができる。得力があっても、修行は怠ってはならない。

精彩をつければ、自然に得力はあるものであるが、得力に大小あって、小悟はかえって大悟の妨げとなる。小悟を捨てて取らなければ、大悟は必ず得られる。小悟を取って捨てなければ、大悟は必ず捨てることになる。

例えば、小利をむさぼる人は、大利を得ることができないようなものである。小利に貪著しなければ、大利が必ず成就する。小利が積もり積もれば、ついに大利に到る。

小利を取って進まなければ、一生小悟の分際に終わり、大自在・大解脱の境界に到ることはできない。大悟に到って大自在の道を得なければ、事と理とが相応しないがために、外道・邪見の中に入る。恐ろしいことである。

小悟を得ては、これを種としていよいよ進み、進み進んで修行すれば、諸仏の大利はことごとく現前し、祖師の関鎖を自然に透過し、まことに事理相応し、行解不二ぎょうげにして、大解脱・大自在の境界に到ることになる。これを進修の要訣という。

一切の法理を尽くし、一切の道德を成就して普く一切衆生を利益りやくし、その機根に応じて説法・教化しても足りないところがなく、我と人と共に大涅槃・四徳の岸に到る。この大行・大願をもって、生々世々（生まれ変わり死に変わりしても）自利利他をわが身の所作として、尽未来際（未来永劫）退転があつてはならない。

その中間で誤って後退することがあつても、脚が弱く路がすべりやすいので倒れたのである。その人が倒れたからといって起き上がらなければ、ついにその場所で転んだまま死んでしまうことになる。

倒れてはまた起き上がり、また倒れては起き上がり、進み進めば、遂に到る

のである。經典に、「一戒を犯せば、直ちに仏前に懺悔してまた道に進む」というのは、このことである。

五、帰本の義

前に述べたように、工夫が増進し、修行が純熟すれば、遂に諸仏と同一体の性に帰するのである。これを成仏という。禅宗の「見性成仏」とはこのところである。

最初の一念が誤って、内なる本心に向かうべきところが、外の万境（さまざまの事物）に執われて、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上という六道に浮き沈み、生を隔て世を重ねて、千生万劫輪廻して、車の車輪のようである。

同じ苦患を受けてきたことは数え難い。生々の骨を積みば、大きな山よりも高く、その膿血をためれば、大海の水よりも多かろうと、如来は説かれている。

いま得難い人間の身を受けて、ことに逢い難い仏法に逢い、特に大乘不思議の正法を聞くことは、人々にとってこの上も無い幸福である。

これを取り誤って捨て置くならば、またこの上も無い罪となるであろう。一度人身を失えば二度と得難いことは、兜率天の上より絹糸を下ろして、大海の

とそつてん

底にある針の穴を通すようなほどであるという。

また六道の輪廻は、生を隔てたことだけではない。一日のうちに浮き沈みすることである。

心正しく物事が邪よこしまでないのは、人間である。自分に相違して怒りを生ずる時は修羅である。自分が好むものに執着すれば餓鬼である。ものを思って心ふさがる時は畜生である。思いも深く嫉妬心も強く、怒りの炎が止まず、人を苦しめ物を害する時は地獄である。これを人の道を失って三塗の種を作るという。

また時には心が静まり、物思いもなく、胸中が澄み渡っている時は、身は人間ではあるが、心は天に遊ぶという。

そうならば、凡夫の一日は、六道を輪廻することが数知れないほどである。その中で、人間の心を持つことは稀である。ましてや、天に遊ぶことはなおさらである。

まずは畜生の物思い、餓鬼の執着・嫉妬心、修羅の怒り、この三塗に遊ぶことが多いであろう。ややもすれば、地獄道に入って、人を苦しめ物を害することが多い。

まことに一日のうち、どの道に遊ぶのが多いだろうかと見てみるがよい。まずは悪道の心が三分の二である。人間はかろうじて一分を守る。地獄がまたその中に交じる。そうであるから、ただ尋常の心持ちではこの悪道は免れ難い。

この一日のうちに、修行の心を発し、声聞おこの四諦の修行、縁覚の十二因縁の観法、菩薩の六波羅蜜の大道、この心を起してかの三塗の種を断ち切るべきである。

大乘の工夫を励み進んで勤める者は、たとえ悟りは未だ得られていなくても、三塗の心が絶えて、人天に遊ぶことを越えて、菩薩の階級に昇る。声聞・縁覚さえ尊ぶべきである。まして菩薩の道は言うまでもない。菩薩の道すらなお有難い。まして一仏乗の法は言うまでもない。

見性悟道は諸仏頂上の禅である。これを心に掛ける者は、仏の直接の子である。念々の上に無上の功德門を成就し、足の挙げるも下ろすもみな般若の妙行（妙なる働き）になる。

般若というのは、読誦の功德ですら貴い。まして般若を行ずる者はなおさらである。人を頼んで読誦してもらっても、災いを免れることができる。まして自分で行なう者はなおさらである。

諸仏は歡喜し、菩薩が手を引き、天神地祇はこの人を擁護し、悪鬼邪神はその影を見ただけで恐れおののく。精霊幽魂はこの人の縁に触れて、解脱の種を得たいと思う。これを**最尊・最上・最第一の法**という。自分のできる限り、随に行なうべきというほかない。(了)

この文章の無断複製・転載を禁じます

著者 田中寛洲